



社会という『監獄』からの、
脱獄としての、『殺人』。

見沢知廉の『蒼白の馬上』に寄せて。

見沢知廉という作家をご存知だろうか。

スパイ肅清事件で十二年の監獄生活を送り、後に出所して作家になり、2005年の秋に惜しまらくもみずから命を絶った作家である。

見沢氏の著作である、彼が2001年ごろに書いた、『蒼白の馬上』という小説に関する考察を記そうと思う。

著者は右翼ではないので、政治思想、ことさら、右翼思想に関してはあえて踏み込まないことにする。この記述は、筆者なりの見沢知廉氏との文学的対話といえる。自分は数年間、見沢氏の著作に救われて、精神的な苦悩の只中、見沢氏の本に出会った。この文章が世に出ることによって、少しでも、亡き見沢氏に対しての恩を返せないかと願っている。なお、この文章は、見沢氏の小説考察の他にも、自分個人の思想や思索も多大に入っていることも前述しておく。

では、本題の「蒼白の馬上」という小説の話に移ろうと思う。

この小説のテーマはずばり、見沢氏が生涯、格闘してきたテーマである「殺人」なのだが。

殺人とは一体、どういう概念なのだろうか。

筆者は殺人それ自体に対して、肯定も否定もしない立場を取る。もし、肯定や否定といったどちらかの意図により説明を求めようとするれば、かえって殺人とはなんなのかについて迫ることの妨げになるのではないかと思うからだ。

「蒼白の馬上」は一言で言うならば、見沢知廉の「殺人肯定論」だろう。

見沢氏は、殺人に関して、総括した結果、本人の事件に関する善悪、苦悩は晩年まで続いたと思うが、文学としての総括、あるいは哲学としての総括は殺人の肯定という形を取ったといえる。文学者にとって、あるいは思想家にとっては、日常生活における思考と作品としての思想は若干、ズレてくるのだと思う。

では、殺人の肯定とは一体、何なのだろうか、著者なりの見解を示しながら、見沢氏の著作の内容を記述していこうと思う。

2

まず、殺人とは他者の他者性を否定する行為である。他者の他者性とはつまり、他人は肉体を持って存在しているが、他人には人格や実存、精神といったものがある、それを否定し、ある種、「殺害」する行為といったところか。おそらくは、殺人が作り出すさまざまな実体感を見沢氏は体験しているだろう。想像ではなく、現実のものとして行った殺人行為の実感。殺人が^{もたら}齎す恐怖、虚無感。人間は罪悪感から逃れる事ができないと聞く。人を殺すという行為はそれ自体が心的外傷を伴う行為なのだろうと。

端的に言えば、殺人とは他者性の延長だろう。極端に言えば、他人とのコミュニケーションの延長線上として殺人という行為は存在している。

レヴィナスという哲学者の言うところの、殺人の^{もたら}齎す無とは、他者の絶対的否定。他者の持つ、人格、生命、生きてきた歴史を否定する行為だ。殺人は恐怖によりなされるのかもしれない。殺人願望とはたとえば、努力や根性などの持つ「意志」とは別次元に立ち現れる。

殺人願望は亡霊のように浮かび上がる。つまり、いきなり人を殺したい、という想念に取り付かれることも多々あるのだ。

恐怖や不安などの感情は、おそらくは、スケープゴートを作らなければ、そういった負の感情を拭い去れないのかもしれない。

それは、連合赤軍の同志粛清事件と符合する。他人に対する恐怖は攻撃性へと転じる。殺人は恐怖や不安の裏返しでもあるため、粛清は捕まる恐怖、こちらが殺されるかもしれない恐怖によって生まれたのかもしれない。

そして、無差別殺人、無差別テロルの無差別性とは無差別な他者でもある。他者の集合体が観念化したものが社会であり、無差別による殺人、破壊活動は観念化した他者を破壊する行為でもある。

また。戦争の時代ではない、市民社会において、人間関係の^{もつ}纏れによって起こる逆上や^{けんか}喧嘩の末、誤って殺害したなどと、テロルによる殺人や理解不能な殺人事件を読み解こうとするのは、別に考えるべきだろう。

何らかの思想を有する殺人行為や、理解できない殺人とは社会と社会性の破壊であり、市民社会を否定するための形而上学的概念が顕現される。

あるいは殺人を肯定する思想とは、他者という観念を殺し続ける。他者というイメージを殺し続けるのである。自分が見て、聞いた、殺してしまいたい人間の持つ想念を消し去りたいという感覚。殺人願望とはつまるところ、自身の実存に働きかける他者性の否定ではなかろうか。自分の存在を脅かすものを、必死で拭い去りたい、消し去ってしまいたいという感覚、それが自己に向かえば自殺願望となり、他者に向かえば殺人願望へと変ずる。

「蒼白の馬上」の元ネタとなっているのは、帝政ロシア時代の左翼テロリストであり作家であるロープシンの「蒼ざめた馬」という小説だ。「蒼白の馬上」の中でも、よくこの小説の内容が引用されている。

「蒼ざめた馬」は、テロリストの情緒を描いた内容だ。「蒼ざめた馬」のワーニヤの言説だが、神の名においては、自身の命と引き換えに殺人を肯定できると説く。

殺人とは自身が処刑される事を前提に、他者を否定し社会を破壊し、自身の死とともに、みずからが神そのものになる神聖な行為であると。それは、日本で言えば神風突撃攻撃隊とリンクする。自身を一個の死そのものに変えることによって、他者の全存在を否定し得る弾丸となるのだと。

死ぬ覚悟。死と刺し違える覚悟こそが、殺人を行う覚悟なのだと言沢氏は言う。

そして、文学もまた、殺人行為であり、戦争であり、革命、維新であるのだと。

世界を書く文学は他人を殺し、私小説家は自分を殺す。小説を書くということ、あるいは表現するということは思想や美的感覚、意思や想像力を実体化し、刻印する行為なのだろう。それは他人の殺害、自分以外の存在の殺害として、観念を実体化させる。

さて、殺人行為の派生として、テロリズムが存在する。

テロルとは神秘主義ではなかろうか。その集団、決行しようとする個人は外部から閉ざされて、

殺人、政治運動そのものが観念化する。つまり、政治活動の別側面は個人と集団をパラノイア化していくということではないだろうか。罪と罰のラスコーリニコフなどは、自我の密室に閉じ込み、自身は超人になれるという妄念を抱くことによって、殺人行為を行った。それが集団レベルでも、社会から距離を置いて集団化した組織は、集団内での妄念を抱いて、殺人や社会の破壊を肯定できるのだろう。

イデオロギーは暴走する。それがドストエフスキーの悪霊のテーマであるといえる。集団において、特定の思想を共有する事によって教祖的なカリスマが集団に観念世界を植え付ける。

それが一個人の場合は、精神病、パラノイアなどとして顕現される場合もある。出口なき自己の観念が攻撃対象を求めてさまよう。よって、思想性のあるものは、殺人にしる、テロルにしる、ある種の神秘主義に巻き込まれる。まるで、自身を突き動かしていく神があるかのように、まるで自分自身に神が憑依ひょういしたかのような妄想を伴うのではないだろうか。

自身が神と同化したかのような全能感。あるいは神という概念を破壊するかのような感覚。

それとともにあるのは、殺人は神秘主義と表裏一体の空虚感なのかもしれない。政治運動、テロ活動を行う上で出てくる犠牲、権力側からの逃亡における疲労、連合赤軍の同志粛清事件などは、その結果として起こったのではなかろうか。極限状態の訓練、雪の山中という正常な思考を狂わせかねない環境、警察からの逃亡の疲労、それらが被り重なって、あのような悲惨な事件は行ったのではなかろうか。見沢氏も自身の事件に関して言う、スパイを粛清したのは雪の日だった。それも酷い豪雪だった。もし、あの日が晴れた桜の咲く日であったのなら、殺人には至らなかったのかもしれないのではないかと。人間は追い詰められた環境から、最後の理性の一線を超えてしまうものなのかもしれない。

さて、政治活動の延長に存在する、テロ活動とは正しいのだろうか。いや。成否という軸で捉えるのならば、テロルとは何なのかを解き明かす事ができないのではなかろうか。

ヒューマニズムの立場から言えば、人間の命をなによりも尊重しなければならないためか、市民社会に生きている人間は大抵、殺人を否定する。法律という規制によって殺人を否定し、もし、市民の大半が殺人を肯定してしまえば、社会は簡単に壊れてしまうからだ。

テロリストは市民社会の破壊者として存在し得るが、テロリスト本人たちの意識は自身をテロリストと考えず、市民社会の解放をうたうことが多い。そこで、テロリスト側と市民の側の認識がズレていくことはザラに存在する。殺人犯は思想なき、テロリストであり、テロリストは思想のある殺人者なのだろう。

殺人者とテロリストの行動規範の違いは、自身の行為を認識しているかどうかなのだろうか。もちろん、殺人者はその動機を後から意味付けするだろう。それは他者に対する説明、言葉、概念、状況をなんとか説明しようとする。

ある意味で言えば、殺人とは「神の所業」でさえある。宗教、神話に見られる行為として神々は裁きを下す。殺人とは神と同化する行為なのかもしれない。神とはなんなのだろうか。神とは善悪を超え出る存在、外側に存在している存在ではなかろうか。

そう、世界にも歴史があるように、人間一個人にも歴史はある。殺人とは一人の人間の歴史を滅ぼす行為だ。この歴史というものは、国家や社会とも言い換えられる。人間個人を殺す行為から、国家レベルの存在を破壊する行為。それは神の行為の模擬行為ではなかろうか。かつては、天災と呼ばれるものに、人間は神を見いだしていた。雷や地震、津波や竜巻や台風、干ばつや^{えきびょう}疫病といったものだ。それらは擬人化されて、様々な神話のモチーフになっている。神や天使や悪魔や怪物は今で言うなんらかの不可知な自然現象を戯画化した姿であったことが多い。たとえば、ギリシャ神話の最高神ゼウスは雷の擬人化とも言えるし、北欧神話において世界を滅ぼす狼フェンリルは地震のメタファーであるという。つまるところ、殺人やテロルとは神話的な現象のようなものですからあるのだ。

4

さて、晩年の見沢氏は酷く、亡霊に苦しんだと聞く。殺した人間、粛清したスパイの幽霊に苦しめられたと。

亡霊とは一体、どのような存在なのだろうか。

亡霊とは、自身の外部としての観念が立ち現れた現象だ。自分自身の認識の外側、たとえ、自分自身では、表層的に罪の意識はなく、殺人行為を肯定したとしても、潜在意識の中では、罪悪感に強く苦しめられる。それは、社会において、「汝、殺すなかれ」と言ったようなメッセージを

、日頃、私たちは知らず知らずのうちにも受け取っているからかもしれない。社会の持つ、人を殺してはいけない、という前提は、強い罪悪感を生み出すのだろう。

ドストエフスキーの小説を持ち出すのならば、「罪と罰」のラスコーリニコフも老婆殺しの罪悪感に苦しめられたと解釈できるし、「悪霊」のスタヴローギンは陵辱して自殺に追い込んだ少女マトリョーシカの幻影によって、首つり自殺を起こしたのだと読める。

不気味なまでに、現れる亡霊の存在。おそらくは、殺した相手の他者性が概念化して目の前に現れて恐怖の対象となり得る現象なのだろうか。

実存主義哲学者のレヴィナスが「実存から実存者へ」にて、シェークスピアのマクベスを問題にしているように、見沢氏もまた、殺人行為を行う直前に思い浮かべた小説として、マクベスを挙げている。いつだって、頭を潰されて起き上がった者などいない。その不気味さ。人を殺した人間と、人を殺していない人間。そこにある殺意は別物ではないのだろうか。なぜならば、人を殺したいは観念であり、人を殺したということは現実の問題として直面してしまうからだ。法律、罪悪感、さまざまな事象によって見える立場は変わってしまう。そのことを、見沢氏は一線と言う。

さて、一線を越えた者と超えていない者。

一線というのが、「蒼白の馬上」の中では書かれる。

殺人とは一線なのだと。どれほど、殺す決意、殺す覚悟、殺人願望、殺人衝動を抱えていたとしても、人を殺した人間と殺していない人間は違う。それが一線なのだと。

人を殺したその瞬間に、見える景色がまるで違う。

実体のない亡霊が出現すると聞く。マクベスがバンクォーの亡霊によって苦しめられたのは、そこに理由があるのだろう。マクベスの例を持ち出さずとも、殺人犯が、幽霊によって悩まされるのは、古今東西、さまざまなエピソードからも寄せられているし、実際、自分の知人にも、殺人に関わった、元少年犯罪者がいるので、その知人いわく、よく幽霊らしきものに、^{うな}魔されるそうだ。

おそらくは、亡霊とは観念化した神のようなものなのかもしれない。神とは思うに、分かり得ない存在の戯画として描かれたものではなかろうか。

亡霊。それはいわゆる、良心であるとともに、殺人行為を行った自身を人間へと引き戻す抑制な

のかもしれない。罪悪感による恐怖は人間としての意思から起因するのか。神の行為の模範を行ったことによる、一線の先から引き戻すことを、無意識のうちに行っているのかもしれない。このような観念的な問題は別として、人を殺した瞬間に、市民社会において殺人犯という^{きゅうだん}糾弾される存在になってしまう、本人の罪悪感だけでなく、社会秩序に^{きゅうだん}糾弾される事によって、環境、意識、社会とのつながりが一変して変わってしまう。どちらにせよ、見える世界が変わってしまうのだ。

5

「蒼白の馬上」を読み解いていくと。

平和な時代における殺人者は、ある種のシャーマンとして機能すると述べている。

少年犯罪者であったり、無差別殺人者であったり、それらはシャーマン、神の代理人として、なんらかの概念を降ろす存在として降下するのだと。そして、それは祭儀の際の祓い清めであり、殺人とは維新であり革命であり、市民社会の外部として存在する。

社会に対するアンチ・テーゼとして理由なき殺人者は誕生する。

むろん、理由なきというのはあくまで社会的規範によって紐とけるという^{はんちゅう}範疇でしかなく、殺人者には殺人者なりの倫理が存在する。酒鬼薔薇聖斗しかり、宮崎勤しかり、宅間守しかり、加藤智大しかり、それらは社会という監獄、精神病院の反命題として法、規範の中に納まらない存在として。現存在に立ち現れる。さらに言うのならば、もちろん、明確な意志を持って殺人を行うことと、衝動的に殺人を起こす行為は、グレーゾーンなのだろう。

さて、このように、殺人者は神の代弁者、一種のシャーマニズムと述べている見沢氏なのだが。結論から述べるならば、見沢知廉という作家は、極度の神秘主義者だったのではなかろうか。殺人に対する神秘感、テロリズムに対する神秘主義。

作中では、自己を歴史に残り得る人間、神の代弁者、天皇の^{ひょうい}憑依した存在として書き記している。

もちろん、小説という形を取っているため、フィクションの部分も強いだろうが、彼の場合は、

私小説、という形を取っているため、上記した神秘主義的な部分は多大にあると言っていい。

6

これほどまでに、殺人という反社会行為、神なる存在の思索、神秘主義に惹かれたのはなぜなのだろうか。やはり、見沢氏はこの社会の規範が、極めて苦しかったからだとは自分は考えている。自分もまた、そのような部分で、見沢氏に共鳴を覚えるからだ。

見沢氏は「調律の帝国」という作品の中で述べる。

市民社会が生きづらいから、政治組織に入り世界を変えて社会を壊したいと考えた。市民社会が監獄のようだと思っていた、と。実際、社会の規範から疎外された人間は市民社会から疎外され、社会とは監獄なのだと感じるのではなかろうか。実際、刑務所の中では中の規則に従えるものは比較的楽に暮らせるのだと聞く。刑務所内でのいじめはひどく、また、反抗するものは独居房に長期間入れられて、拘禁症と呼ばれる症状で、強迫神経症や統合失調症などの精神病を発症するのだと。市民社会もまた、規律訓練によって従えないものを迫害し、社会に適應できないものは社会から弱者として疎外されていく。市民社会の監獄性とは何なのだろうか。それは閉塞^{へいそく}された出口のなさから生じるものだろう。自分自身の実存のよりどころのなさ、他者の暴力性、自分がどこにも出られない、自分の精神が拘束されているのだという感覚は、亡霊のように姿を現して、確かな実体感を持って立ち現れる。

フーコーを読み解くまでもなく、この社会は監獄であり精神病院としても機能している。この世界は、規範、規律、収容、調律、社会性といったものによって成り立っているからだ。それに無自覚な者は、社会という規範に適應しているわけであり、その規範から逸脱してしまった時、おそらく世界の齎^{もたら}す前提が崩壊する。それこそが、監獄や精神病の持つ作用なのではないだろうか。監獄や精神病院では、その社会におけるもっとも特化した部分が顕現されていると聞く。

監獄とは自分自身の存在、実存、意思、思考が破壊されそうになる恐怖。生命の危機からなる。自分の心が、破壊されるのではないかという恐ろしさ。分かる人間には分かり、分からない人間には生涯、分からないのかもしれない。世界と自分がズレたとき、それは起り得る。そう、見えない監獄の壁を幻視する人間はいる。壁は見えないが確かに存在する。それは他者に見えず、自身の悪夢、恐怖として、実体を持って迫り来る。

政治運動、その延長線上のテロルは、監獄としての社会の生きづらさを破壊するために、行われるのだろうか。言葉にできない生きづらさ、焦燥、怒りの矛先を、政治運動やテロル、殺人は与えてくれる。言葉にできないものとして、象徴的に監獄のようなもの、檻のようなものというのが存在している。

世界は檻なのではないだろうか。あるいは「牢獄」といっていいのかもしれない。世界は無理やり人間を規律の中に押し込めようとする。規律に従える人間と従えない人間が存在する。ADHD、アスペルガー症候群、自閉症など、脳の機能によって、規律から外れざるを得ない人間も存在する。また、統合失調症など、脳の疾患によって規律から外れてしまう場合もある。

この世界は狂っていると感じ取ってしまった人間からしてみると、この世界は自分以外は精神病ばかりの精神病院にも感じ取ってしまうし、この世界は拘束的で刑務所のように感じってしまった人間からすると、この世界は刑務所なのだ。つまるところ、この世界にとって、正気を感じ取ることができる人間は正常であるし、この世界に狂気を感じ取る人間からしてみれば、この世界は異常以外の何者でもない。ある意味で言うのならば、それこそが世界の在り方であり、この世界の本来の姿ではなかろうか。この世界は自分も他人も正気であるという前提を作らなければ、皆、狂気の中へと落ちていくのではなかろうか。そして、それをあえて言うならば「檻」という言葉で表したいと思う。

見沢知廉も、そして自分もまた、この世界が檻であり、狂気の産物である、といった感覚に^{おちい}陥ってしまった人間なのだろう。「生きづらい」と分かりやすく述べる事も出来るし、この「生きづらい」という言葉、ある福祉関連の障害者達が集まる場所にて、よく皆が口にする言葉なのだという。

そして、生きづらさ、「檻」を作り出しているのは、ある部分においては、それは無知であるがゆえなのかもしれない。この無知というものは、経験が無い、知識が無いというだけの意味ではなく、人間はこの世界がまだまだ未知であるという事を理解していない。この世界は分からない外部が溢れており、外部が分からないからこそ、人間は無知を享受しなければならず、スピリチュアリズムが蔓延するのかもしれない。この外部とは、科学的に解明されていないものから、昨今起こった東日本大震災を代表する自然災害などの神的暴力、もしくは他人や隣人もまた未知であり外部なのではなかろうか。他人の経験は分からないし、他人の痛みなど分かりえぬものでしかないだろう。レヴィナスは言う、「存在は殺人である」のだと。他人とは、自分自身の存在を殺す可能性をつねに秘めた存在なのだろう。このように、この世界は檻を作り出す。この世界は暗闇の中にいるのと同義である。私たちは、暗闇のような世界の中、無知の下、投げ出される。多数派の倫理に従って、多くのものは世界の暗闇から離れたかのように思い込む。多数派とは檻だ。多数決も檻。檻とは壁であり迫り来る。檻を破壊したいという願望が、殺人やテロルを生む。テロルとは個人ではなく個人の集合となる社会自体への殺人として、顕現される。殺人や

テロルとはつまるところ、監獄としての社会、社会性、他者を破壊する行為なのだろう。

見沢氏は「調律の帝国」という小説にて、精神科医を相手に「人類の白血球論」という自論を主張する。いわく、健康な時に人体において白血球が増殖してしまえば、それは有害だが、人体が危機に晒されたときに、白血球が増殖しないと人体を治療できない、俺は人類の白血球なのだ。病んだ世界を壊すために、俺のような存在を社会は合理的に生み出したのだと。

7

さて、見沢氏と見沢氏の小説を踏まえながら、自分個人の思想も多大に入ってしまった。思想というか、率直な感性も書き記してしまったかもしれない。少々、異色な評論で申し訳ないが、見沢氏が飛び降り自殺をする事なく、人を殺すこともなく、生きやすい世界に生まれていたら、と思えて仕方がない。実を言うと、自分は生前の見沢氏にお会いした事がない。2009年の、劇団再生という見沢知廉の「調律の帝国」を題材にした劇にて、彼のお母様にお会いして、作家になりたいと述べた。

自分は、見沢知廉に深い共感を示している。それは誤解かもしれない。けれども、どこか見沢氏に、自分自身を重ねて投影している部分もある。

自分にも、一時期、あるいは今も、殺人願望や破壊衝動に苛まされることが多々ある。どうか、それを表現、創作という形で昇華したいと思っている。知人や友人には、実際に殺人者や関東医療少年院に入った者もあり、彼らとさまざまな話もした。自分の生きづらさに共鳴する部分も多い。

この世界は、自分のような人間にとって生き易い世界になればいいと思っている。それは、只のエゴイズムや甘えでしかないのかもしれない。けれども、痛みは確かに存在しているし、それは自分自身の実存として生きていこうと思っている。

また、見沢知廉が2005年の9月7日に亡くなって、約七年もの時間が経過しているが、また彼の著作が広く読まれることが来ればいいと願っている。

見沢知廉 『蒼白の馬上』 青林堂、2001年

見沢知廉 『調律の帝国』 新潮社、1997年

レヴィナス 『実存から実存者へ』 西谷修訳 ちくま学芸文庫、2005年

ロープシン 『蒼ざめた馬』 工藤正廣訳 未知谷、2006年